発表要綱

「縮小社会」像への疑問

・・・石田靖彦氏の「アイゼンスタインの思想」の紹介を受けて・・・

1-1 まず、自己紹介

人生二毛作・農的生活・「半農半 X」 -高野孟氏の言葉

1-2 メール紹介 今考えていること

・さよなら反原発 1000 万人アクションへの意見 私の問題意識

＊反原発運動で一番大切なことは、原発事故の問題を通して国民の意識を変えていくことであって、反政府の権力闘争を組織することではない。福島県で反原発を主張していた人たちを非国民のごとくあつかっていた人たちが、事故で被曝や避難生活を余儀なくされると、今度は被害者意識で政府の対応を批判している。このように自分が賛成していたことを忘れてしまったごとき意識をこそ、揺さぶり掘り起こして自ら思考する機会とすることが重要である、と考える。このような無節操極まりない意識こそが、分厚い保守の岩盤を形づくっている。

また、この取り組みを通して、原発と人類の共存のありえないことを、多くの国民にアッピールするべきであろう。

・湯浅誠氏へのメール ＊補助資料の抜粋

友人や知人たちの、「精神的なホームレス化」ともいえる状態

かつてともにいろんな活動をしてきた人たちが、精神的にひきこもり、口先だけ政府批判をくりかえしています。「年金が少ない。生活が苦しい。」とか、「政府は、何をしているのか。」と、いろいろと言います。60 歳を越しても身体は元気なのだから、「生活が苦しいのであれば、働け。」「60 歳になったのだから、昔のように朝から晩まで働かなくてもよいから、一週間の内半分でも、あるいは半日でも働け」と思うのですが、汗を流して働くことを嫌がります。香川の田舎で住んでいるのに、田畑があるのに、農作業はしたくない、なんて言います。再就職している人たちのことを話題にすると、「一生懸命に、というのがどうも・・・。」

もう、社会の寄生虫のようです。このような友や知人との関係を断ち切ろうとする思いが、私の心の中でもくもくと湧いてきます。「もっと生活に苦労したら、何かを始めるかも?とも思うが、それはありそうにもない。このような連中にまで年金を支給することなどとんでもない、なんてまで思ったりします。「もっとひたむきに、汗して働け。」と、言いたい。しかし、ここまで思ったとき、彼らの顔が、ふっと浮かぶ。今までの生活での苦労がこういう言動をさせているのであろうと。そして、彼らの人生経過を私の知っている限り思い出す。彼らとの関係を断ち切るのは、簡単なことです。でも、・・・。

彼らは、社会との関わりを自分で断ち切ろうとしているように見えます。このようなことは、湯浅様の『ヒーローを待っていても世界は変わらない』の後書きにあるように、コミュニケーション能力の減退だと思います。いや、コミュニケーション能力を、現代にそくして以前より高度にすることができていないためでしょう。今の社会状況へついていきかねているのは、私も同じなのです。でも私は、今回のような講演会等には出ていくことにしています。そして、いろんな人と直接話すことをしています。でも、彼らは、このような初対面の人たちと話すということをしないのです。自分の周りの小さな関係で、事済ませているようです。そのために、ますます保守的になっています。だから、マスコミの通りの言動をしています。

また、このようなことは、彼らが 60 歳を過ぎてからの人生の二毛作の準備をしていないのも関係している、と思います。60 歳以後の生き方を模索することなく、思考することもなく、今日を迎えてしまっていると、私は解釈しています。彼らは人生の再出発への方針をたてることが、方向転換を図ることが、できないようです。

私は、そんなにはっきりとした方針ではありませんが、ともかく「人生二毛作、農的生活、半農半X」という方向性を掲げています。歳をとると可能性が減っていくのですが、それでも、自然とともに、季節の変化を体感しながら、収穫の喜びを感じたいのです。そうすると、農作業での少しの金銭収入得ることができます。それを年金にたすことで、金銭的・精神的な余裕を感じつつ生きていけます。夏は大粒の汗を落としながら、今の作業が収穫物となって消費者に届くことを想像して日々過ごしています。先祖から受け継いだ田畑を管理することを通して、・・・。農業は金銭的に考えると割に合わないとは思いつつも、汗を流して働くことは楽しいことなのです。我が家の食卓には、何種類もの食材が並びます。この色とりどりの食品を数えながら食事をすることは、楽しいことです。

このような思いから、講演会に参加しました。おかげで、友人や知人と関われるエネルギーは、少しは蓄えられたように思えます。

・unei-mirai@green-kagawa.sakura.ne.jp へのメール　＊補助資料の抜粋

先日、神戸で湯浅誠さんの講演(『ヒーローを待っていても世界は変わらない』朝日新聞社発行)を聞きに行き、あるカプセルホテルに泊まりました。その時休憩室で『縮小社会への道』を読んでいると、この本の題名にひかれたのか、まったく知らない方が私の後を追いかけてきました。そして、「縮小は、困る。それでは、・・・。」と、話しだしました。この人も、心の中では日本社会が「縮小社会」へと向かっていることを感じているのです。でも、その現実を認めたくない、それを防ぐ何か手立てはないか?と、日々試行しているのでしょう。そうでないと、話しかけてきたりしないものです。そこで、本の紹介と、書かれていることの概説を話しました。人はともすると、そしてしばしば、見たくない事実を退けてふたをしてしまい、自分にとって都合の良い事を拾い出してそれを現実として主張します。現代日本の人たちの快適な暮らしを求める意識を、藤田省三氏は「安楽の全体主義」としてその問題を指摘したことを、思い出しました。

1-4　根づき、生きる場について・・・私は、何故、この地で、精神的異邦人であるのに?

シモーヌ・ヴェィユ『根をもつこと』を参考にして考える。＊補助資料参照

大学の同期の友人⇔幼年期の思い出　農業労働が楽しい遊びのように光り輝いて見えた瞬間

農民の意識(労働者への対抗意識、羨望の気持ち)　**縮小生活事始め**

2-1　共同体の問題・・・互酬制(性)の毒・・・

『とんでもないことが!』青野豊一　図書新聞社　2012 年 2 月発刊

ここに書かれていることは、田舎の封建的人間関係の残りかすの問題ではない。今も我々の日々の生活の中にある、対人間関係のありかたを表すものである。未来社会の共同体でも発生するであろうことを指摘。　日本的閉鎖性?の社会意識、遅れて近代化を始めた国の社会意識

2-2 相互扶助の共同体論の危険性について

「アイゼンスタインの思想への疑問

石田靖彦氏のまとめよりの引用

1-(8)カネの経済は自他を分断。金を払えば何の関係も後に残らず、絆も共同体も生まれない。

7-(50)贈与は・・・匿名慈善事業とは違う。匿名的な慈善は、その後の社会的関係を完全に遮断し、貨幣による交換と類似。

・感謝の気持ちが社会に循環し、共同体が生まれる。

-(53)贈与社会であって、初めて本当の共同体になる。

-(54)贈与経済は匿名性でない。誰が何を与えたかは皆にわかる。

★ここには、互酬制(性)の毒についての認識がない!!!

★『縮小社会への道』第 3 章は、倫理性が濃厚に出ている。人間の善意を過大に評価して、それに基づいて未来社会を構想してはならない!! ＊これでは、近代市民社会の否定になりかねない!

『ぼくはお金を使わずに生きることにした』(マーク・ボイル　紀伊国屋書店)への疑問

本からの引用(＊は私の追加)

「・・・ほしいのは、対立ではなくコミュニテイだ。争いではなく友情だ。・・・。」

「交換(＊地域通貨の意義を一応は認めつつも)に基づくという点ではお金と同じで、無条件に与えるわけではない。」

「ある程度の大きさのコミュニティの一員となって、そこにいろいろなスキルを持ったメンバーがいれば、人の手助けをするとき、相手がお返しに何をしてくれるかなんて心配しなくていい。支援が必要なメンバーにはいつでもコミュニティが手を差し伸べてくれる。」

「(現状の貨幣制度と対比して)人との絆に安心を見出すか、である。一方では高い塀がはりめぐらされ、もう一方では強固なコミュニティが築かれる。」

「・・・分かち合いはきずなを作り出し、恐怖心をやわらげ、我々の生きているこの世界も捨てたものじゃないと思わせてくれる。」

★これでは、宗教教団形成の物語である。19・20 世紀の思想の変遷とその問題についての知識の欠落した物語である。ある意味、反動的思想である。 美しいことを夢見て、醜いことをする!

3 「交換」から見る「縮小社会」像　バランス大切!　★補助資料の最後のページ参照

① 未来社会は、今の世界の人間関係と次元のまったく異なった社会になるわけではない。
また、今の世界との関係を断ち切った別の地に誕生するわけでもない。
市場経済の必要性を、貨幣の果たしてきた積極的な役割を確認しなくてはならない。

② 「縮小社会」とは、「A 互酬的交換」「B 収奪・再分配」「C 市場での貨幣による商品交換」も機能する社会であろう。ただし、この A・B・C がお互いにその機能を制限・抑制・縮小しあい、そのバランスを工夫する社会にならなくてはならない。そうすることで、量的な縮小社会は、やがては住みよい社会に、現状とは質的に異なる社会になるであろう。強い倫理観で作り出してその思想で維持管理する社会ではなく、少しずつのシステム変更を通して、人々の意識が自然に今と比べてより良くなっていくのが未来の「縮小社会」であろう。

A 家族内や地域内の互酬的な関係の弱体→個々人の自立の促進

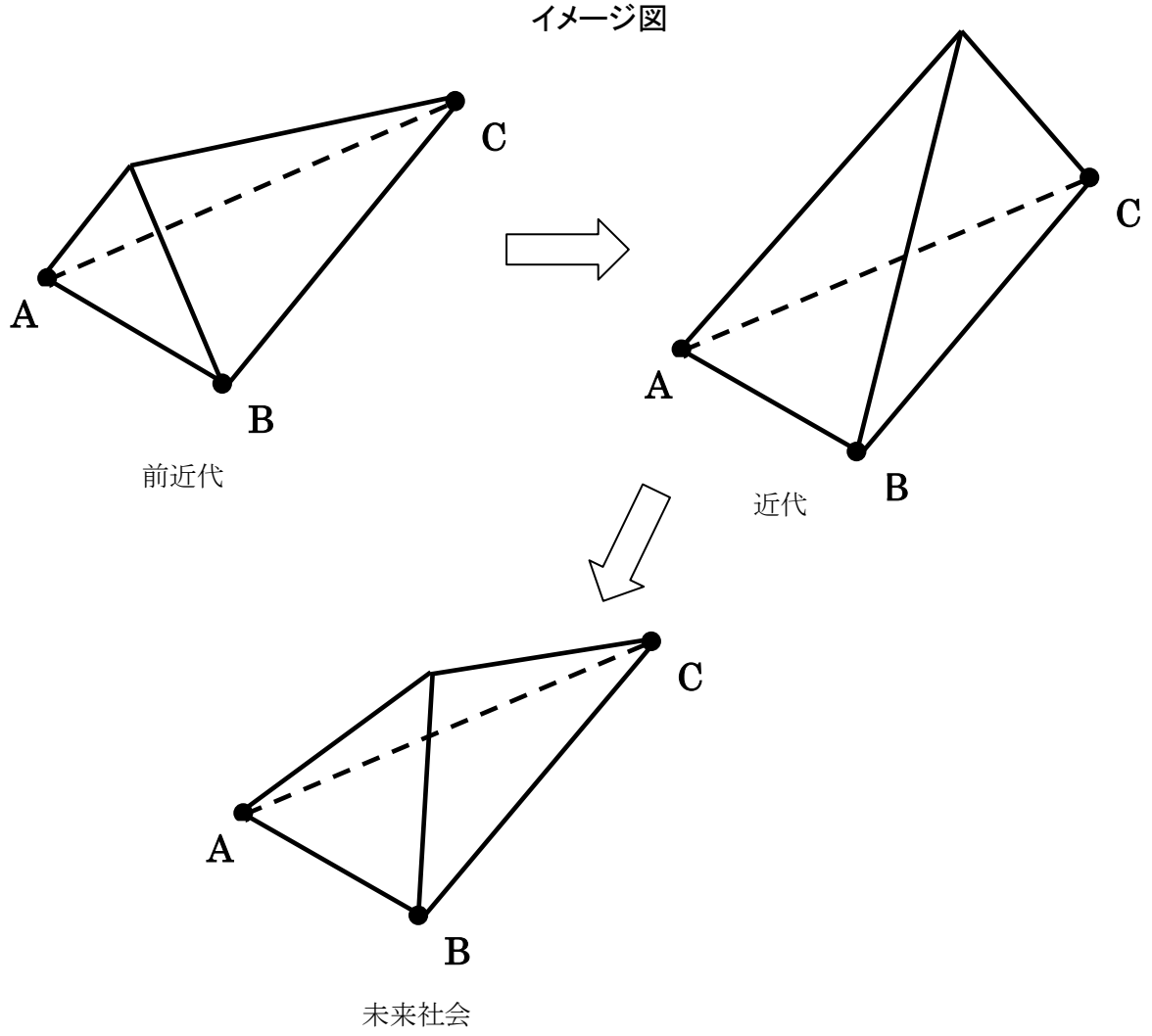
B 強圧的統治機能の減退→行政サービスの充実(子育てや介護の支援)で個人を尊重

C 投機的商取引の在り方の規制→適度な競争関係のある市場経済

一定数の国民は、経済状態が今後も好転しないことを、それなりに感じている。産業の停滞・不況、人口減少、農村崩壊、年金等の社会保障制度の崩壊等の事態となり、社会基盤の大きな揺らぎを、漠然とではあるがそれなりに不安を感じている。そこで、優れた指導者が現れて、社会問題を一挙に解決することを熱望するようになっているようだ。この不安感をあおり、独裁体制を求める政治勢力が台頭してきている。

私たちは、未来のため、今を我慢しなくてはならない。しかし、それを拒否する人たちがいる。戦前のドイツでは、新中間層と言われていた人たちが、未来社会のために頑張ることは共産主義的であり、ユダヤ的であるとするナチスを支持した歴史がある。生活苦を叫ぶ人たちはそれまでに努力をしなかった人たちであり、平等な権利と生活を求めることは間違っている、との意識状況にあるようだ。　　縮小社会に向けた政策⇔新自由主義の政策

この「縮小社会研究会」は省エネ対策の必要性を訴えているのではなくして、社会の在り方の変革の必要性を提起している。そのためには、理念の一層の明確化と、その社会像の大枠と、具体方策等を指し示すことが、必要であろうと思われる。この一助となれば、と思い提案した。

青野豊一/2012/12/16　第 12 回「縮小社会研究会」

イメージ図